

1.印象派について。

19世紀後半よりフランスから広まった芸術運動である。

それらの画風の特徴として、描く対象の輪郭などから周囲の光、空気の変化を正確に描こうとしたものとなっている。

この画風が生まれた背景には『アカデミー』の存在がある。当時、フランスでは『アカデミー』が美術に関する行政や教育をしていた。そして、そのアカデミーでは『歴史画』が評価の基準となっており、その他の画風は低俗とされ評価が低かった。しかし、19世紀からそういった世間の評価、流行に沿わない画家たちが現れ、『印象派』が生まれる下地が出来上がった。

そして、1860年代初め、クロードら4人によって『印象派』の構想がなされ、サロン（官展）へ「エドゥアール・マネ」による印象派作品『草上の昼食』が出品された。しかし、当時の審問会はこれを落選とした。その際、同じく友人たち印象派の作品も落選としたのでこの年の落選作品は例年に比べて非常に多かった。しかし、この落選した作品を見たナポレオン3世により『落選展』が行われ、これらの作品が衆目を集めることになった。この『落選展』をきっかけに画家たちによる独自の展覧会が数多く行われ、徐々に人々に『印象派』作品は受け入れられていった。

2.キュビズムについて。

別称立体派。20世紀初めに「パブロ・ピカソ」、「ジョルジョ・ブラック」により創始された現代美術である。

画風の特徴として、いろいろな角度から見た物の形を一つの視点に収めて描こうとしたものとなっている。

キュビズムは大まかに『分析的キュビズム』と『総合的キュビズム』の二つに別けられる。分析的キュビズムは、自然の造形、形態を小さな面の集合体と見て、それを小さく切子面状に分解、再構成した表現である。総合的キュビズムは、コラージュとも呼ばれ、絵画において異質なものの、そして日常で身近なものを用い

て描く表現である。

最初に描かれたキュビズムの作品は『アビニヨンの娘たち』である。1907年にピカソによって描かれたこの作品は最初にピカソの友人の一部にだけ見せられたが評判は良くなかった。しかし、その中でブラックはその表現法に共感し、自ら『キュビズム』による作品を書き始めた。

その後、作品を展覧会に持ち込んでみたり、ピカソとブラックの共同でキュビズムによる表現の追求をして見たりしたが、始めて世にキュビズムが知られるようになったのは1911年に行われた美術展からである。作品を見た観覧客からの評価はすこぶる悪かった。しかし、その後もキュビズムの作品は数々の展覧会にて発表され存在を知られるようになった。

3.近代で芸術史において重要な芸術家。

昨今での世界の絵画の事情は従来のもものと比べ、そのあり方が大きく変容しているように思える。

時代の発展に交通の発展は切って離せないものであると私は考える。船、蒸気機関車と続き、20世紀に初頭に飛行機の前身である動力飛行をライト兄弟が成功させ、そこから改良を続けていった結果、険しい山々があろうとも飛行機で空を行き、超えて行くことが可能となり、互いの国境の距離を短くした。そして近年、コンピューターが一般に流通したことによりその国境は無くなろうとしている。その時代の流れは芸術の世界を与えていると考える。交通の手段が少なかった頃は土地ごとに芸術が色濃く現れていたが時代が進むにつれて、芸術は風土によるものではなく個人によるものに移り変わっていったように感じられる。それにより芸術の環境は細分化され競争の流れが活発になっている。このことから私は近代の芸術で必要なものは「オリジナリティ」と考える。

そして、オリジナリティが必要な現代において、重要な芸術家として私は「オディロン・ルドン」がそれであると考えます。

ルドンが近代の中で重要な芸術家である根拠として、以下の二つの理由が挙げ

げられる。

一つは作風で、ルドンの作品は黒色を基調とした陰鬱としたものと鮮やかな色彩を使用したものに別れる。それらの作品は共通して光について深く追求したものとなっており、幻想の世界を題材とした作品が多い。これらの作品の中には特徴的な暗い雰囲気でありながら表情が豊かであるものもルドンは描いている。

次の理由は独自性であるが、ルドンが画家として活躍した19世紀後半から20世紀後半に従来の印象派から抽象画が主流に変わる大きな転換点にあった。しかしながら、その中でルドンは独自の道を進み、自身の作風を変えなかったのである。そしてこの姿勢こそ私が近代において重要であると確信している要素である。先述したように現代での芸術の環境は細かく別れている。ネットワークが普及した現代において、容易にそれらのものに触れることができるようになり個人の芸術は感化され続けるようになった。その状態で自身の「オリジナリティ」を保つ事は容易ではないだろう。だからこそ「オリジナリティ」保てる事こそが真に「オリジナリティ」に繋がっているのである。

以上がオディロン・ルドンが近現代の芸術家で芸術史において重要な理由である。